

要 旨

1 作成の背景

鈴鹿医療科学大学 豊田長康 学長（日本医学会連合 教育・研究推進委員会医学系研究力向上検討ワーキンググループ）の分析によると、日本の先進諸国に対する研究競争力は2004年頃を境に約40%低下し、人口当たりのTop10%論文数では、3,000以上の論文を発表している57か国中37位と発展途上国レベルとなったと報告されている。同様の危惧は、歯科医学研究者の間からも発せられており、様々な要因が歯科医学研究推進に負のインパクトを与えており、懸念されている。これらの問題点や課題のいくつかは他領域と共通すると考えられるが、歯学研究及びその環境に特異的な課題も存在するものと想定されている。そこで、第26期の歯学委員会は、病態系歯学、基礎系歯学、臨床系歯学の3分科会と連携し、歯学研究の現状の把握及び同研究領域が抱える課題の抽出・分析、それらに対する短期・中期的な対策を取りまとめ、「報告」として発出することとした。

2 報告の内容

(1) 博士号取得後の研究環境における課題と対策

医学・歯学といった医療系分野においては、博士号取得後の研究者が診療・教育業務の増加や雇用の不安定化といった複合的な課題に直面しており、研究に専念できる環境の確保が困難な状況にある。そのため、大学病院の機能や責務を再定義し、教員の負担軽減と研究時間の確保を図ることが求められる。また、若手研究者の育成体制の強化や安定的なポストの確保、国際的な研究経験の機会の拡充、さらにコアファシリティー（最先端研究機器を具備した共通機器室）整備などによる研究基盤の強化も重要である。加えて、大学間・部局間連携の推進や研究評価指標の多元化を通じ、歯学研究の持続的な発展と競争力の強化に取り組む必要がある。

(2) 学部・臨床研修・大学院での研究力向上に関する課題と対策

歯学領域における研究力低下の背景には、単に個々の大学の教育現場の努力だけでは解決が難しい構造的な問題がある。これに対応するためには、大学、国、及び関係機関が一体となって、以下に示すような抜本的対策を推進することが求められる。

- ①大学病院での臨床業務と研究活動の適正なバランスを保証する歯学系大学（総合大学歯学部・大学院歯学系研究科を含む）の環境を整備する。
- ②若手歯科医師の研究志向の維持・育成に柔軟に対応した専門医制度を構築する。
- ③大学院教育カリキュラムの現代化・国際化を推進し、博士号取得後のキャリアパスの多様化を支援する。

(3) 私立大学が抱える課題と対策

私立歯科大学では、多くの場合、単科大学であるが故の課題に直面している。例えば、他分野との連携や学内外の共同利用体制が整いにくく、高額機器の導入・維持やリサーチ・アドミニストレーター(URA)設置にかかるコストが個々の大学に重くのしかかっている。学部横断型の研究支援組織を構築し積極的に外部資金を獲得することによって研究環境を維持・向上している私立歯科大学もあるが、大学自身の自助努力に加え、国による財政支援の更なる拡充も必要な懸案事項と考えられる。

(4) 地方大学が抱える課題と対策

基盤的経費から競争的資金への移行が促進され、都市圏への選択と集中が加速することにより、地方大学では、研究体制を支える基盤的経費の不足や、競争的資金を最大限活用できない現状による、過度に競争的でハードワークを要する研究環境が生じている。また、コアファシリティーの不足、事務職員の不足による研究者の事務的負担の増大が、研究環境の悪化を引き起こしている。さらに歯学領域においては、歯科医師臨床研修制度の導入以降、出身地方大学での卒業生の定着率並びに大学院進学率は大幅に低下しており、大学院進学者数は圧倒的に都市部に偏っている。そのため、都市部と地方での人材の偏在を解消し、歯学部入学から卒業、研修、大学院進学、研究者養成に至るシームレスなシステムを構築し、都市部の大学との有機的連携を促進する必要性がある。

(5) 産学連携における現状と課題

医療分野の一翼を担っている歯学研究において、産学連携は極めて重要な活動の一つである。歯学分野における課題として、実用化される価値と実用化戦略の見極め、歯学系大学における知的財産に関する教育の推進、新時代の歯科医療を想定した予防医療や先制医療などをターゲットにした基礎研究・産学連携研究を充実する必要がある。

(6) 歯学研究の支援・発展に向けて

日本の歯学研究に対する国際的評価や社会貢献を考えた場合、時代の潮流を適切かつ早期に捉え、リーダーシップを發揮していくことも重要である。そのためには、我が国の歯学研究の強みといえる歯や骨を対象とした硬組織研究、加齢研究、ビッグデータ研究、ゲノムコホート研究などに加え、口腔の健康と全身の健康に関連する学際的研究を、国際的共同研究として発展させ、我が国の歯学研究が国際的コンテクストと大きな乖離を生じないことも大切である。そうすることで、日本の歯学研究が、世界から注目され、国際的貢献度を高め、ひいては全世界の健康寿命の延伸に大きく寄与していくものと期待される。